

子どものけが（肘内障と手指の骨折）

子どもの骨折はレントゲン撮影が必須

可愛い女の子がお母さんに抱かれて来院されました。話を聞くと、お姉ちゃんと遊んでいるとき手を引っ張られて左腕が痛いと言っています。腕が上がらなくなったとのこと。骨折するほどの力が動いていないので肘内障と考え、すぐに整復処置で正常の状態に戻しました。「もう直りましたよ」といっても女の子は初め恐がって腕を動かさなかつたのですが、しばらくして「お母さんに抱きついてごらん」というと、しっかりとお母さんの首に抱きつかれました。これで治ったのが確認でき、母子ともども機嫌よく帰られました。

肘内障は、まだ大きく成長できていない肘の骨が固定している靭帯から部分的にずれる現象で、成長すると自然に起こらなくなりま

す。2〜5歳に発症し、以降、成長とともに見られなくなります。

また、この年齢の子どもは元気で走り回っていますので、転んで手をついて肘を骨折することもあります。肘内障と骨折の区別のためレントゲン撮影のできる整形外科医を受診してください。

子どもの骨は成長していますので、骨折しても少しずつついても数年でまっすぐに治ります。自家矯正といえます。これが明らかになっているので子どもでは手術をあまりしません。しかし自家矯正も限度があり、関節に近い骨折はきちんと直さないと後で変形が残って動きが悪くなることがあります。

スポーツが盛んになり、手や指の骨折も多くなっています。手指の骨は動きが大切なので、骨折整復後にナックルキャストという特殊なギプス（石黒法）を巻くと動かしながら治すことができます。ある程度動かせるの

で、その間あまり不自由を感じませんし、動かしながら骨癒合を待つとさらに整復や回復後の動きが良くなります。とにかく骨折は早期治療が大切です。

ナックルキャスト（石黒法）

手指の骨折整復後に有効なギプス。指をある程度動かせるのが特長。



【屈曲時】



【伸展時】